



# Newsletter

NO.7

AUGUST 2003



## 鹿児島高等農林学校 養蚕繊維関係資料

2002年11月、農学部生物資源化学科食品機能化学講座より、カイコの繭や綿、糸、布、ロープなど、養蚕繊維関係の資料約280点が寄贈された。鹿児島大学における養蚕の研究は、1920(大正9)年、鹿児島高等農林学校に全国唯一の養蚕学科が設置されたことに始まり、鹿児島農林専門学校、鹿児島大学農学部へと引き継がれ、1968(昭和43)年の改組によって終了するまで48年間続けられてきた。この資料は、その研究が養蚕製糸のみならず、動植物繊維原料の生産や、精製・加工にまで及んでいたことを物語っている。鹿児島大学総合研究博物館では、鹿大の研究史を示すこの貴重な資料を長く保存するため、整理保管作業を行なっている。

## 鹿児島高等農林学校時代の機器・試料・研究ノート

鹿児島大学農学部の前身、鹿児島高等農林学校(1908-1944年)時代を中心とする、さまざまな実験器具、当時の研究ノートや得業(卒業)論文、プレパラートが総合研究博物館に寄贈された。いわば研究の「3点セット」であり、当時の学術研究の様子を知る上で貴重なものである。またこれらの資料から当時(大正期から昭和初期)の研究環境の充実ぶりを垣間見ることができる。

鹿児島高等農林学校(以下 高等農林)は、盛岡高等農林学校(岩手大学前身)につづいて1908(明治41)年設立、1909(明治42)年9月に農学科、林学科の2科をもって開校した。その後、養蚕学科、農芸化学科等が設けられた。

2002年8月、農学部生物生産学科 坂巻孝氏・岩井純夫氏、生物資源化学科 竹田靖史氏か



らそれぞれ連絡があり向かったところ、鹿児島高等農林学校さらに鹿児島農林専門学校及び鹿児島大学農学部時代の理科学機器、その当時の研究ノートや卒業論文(その多くは得業論文と称する)、プレパラートがまとまって見出されていた。黄金色に輝く戦前のドイツ製顕微鏡には、居合わせた人々から感嘆の声が上がった。なかには先代の教授退官以後「開かずの棚」となっていた場所で見出された研究ノートや、長いあいだ収められていたプレパラートなど、古くは高等農林開校間もない頃のものもある。

坂巻氏によると、「高等農林開校当時の教授 岡島銀次氏[在任：1909(明治42)年7月～1936(昭和11)年1月]が、農学科動物学教室で教育研究に使用した器具、当時の教官や学生らにより作製されたプレパラートや執筆された論文を、教室(現在の病害虫制御学教室)で受け継いで保管してきた」そうである。

プレパラート箱を収めた木箱(高さ495mm×幅335mm×奥行き215mm)は、いずれも歪んだ状態で4箱見出された。木箱を傷めず、なかのプレパラート箱をようやく取り出すことができた。ガラスプレパラート100枚が木製プレパラート箱に収められ、さらにこの木製プレパラート箱10箱が前述の木箱に収められていた。単純に全部を足すと4000枚のプレパラートを収納できるわけだが、実際には約3000枚が確認された。90年前後の年月を経てなお、顕微鏡による観察に耐えうる試料もあり、当時の生物切片の作製、包埋技術の確かさがうかがえる。

論文・レポートなどの文献資料については、坂巻氏より304点、岩井氏より31点が総合研究博物館に寄贈された。この文章の執筆の間にも、この文献資料についての研究利用の問い合わせがすでにきている。



同時に寄贈を受けたプレパラート標本とノートとの関連を調べてみた。304点の文献資料のうち、ある研究ノートには生物標本に関する記述があった。1920年代のプレパラート箱のひとつに記載されている文字が、この研究ノートの文字と筆跡が類似しており、ノートに書かれた生物種は、プレパラートに記載されたものと多くが一致した。このノートは、これらのプレパラートを記載した人物によって書かれたものと判断できそうである。現在このノートを中心にプレパラートの作製された経緯を調べている。

学生ボランティアの末岡晴菜さんと渡辺則子さんに、ニュースレターNo.3で紹介した第七高等学校当時の理科学機器の整理にひきつづき、機器や試料について整理と登録準備を手伝っていただいた。今回は二人にボランティア作業の感想をもらい、次ページに掲載した。

今回紹介した標本・資料は、3年前の学内所蔵標本調査時点では把握されていなかったものである。鹿児島大学総合研究博物館に対して、2002年度では機器類について16件で350点余り、学術標本も合わせると42件で8万点余りの学内外の学術標本に関する問い合わせや寄贈が相次いだ。ただし、現在は博物館収蔵施設が確保されるまでの当面の間、原則として各部局の標本は各々で管理することになっている。いずれも教育研究上貴重な標本であり、早急な整理・保存・登録が望まれる。  
(内木場哲也)

## 鹿児島高等農林学校時代を中心に作成された文献資料

### 文献の概要

・本文献は、鹿児島大学農学部生物生産学科で長く保管され、2002年8月8日に教官の坂巻祥孝氏を通して当博物館に寄贈された。

・1922(大正11)年～1964(昭和39)年までの43年間分(鹿児島高等農林学校、鹿児島農林専門学校及び鹿児島大学農学部時代を含む)の304文献。ただし、1923年、1944～1946年、1952年、1956年、1958年及び1963年を欠く。それらの多くは、高等農林学校時代の貴重な文献である。

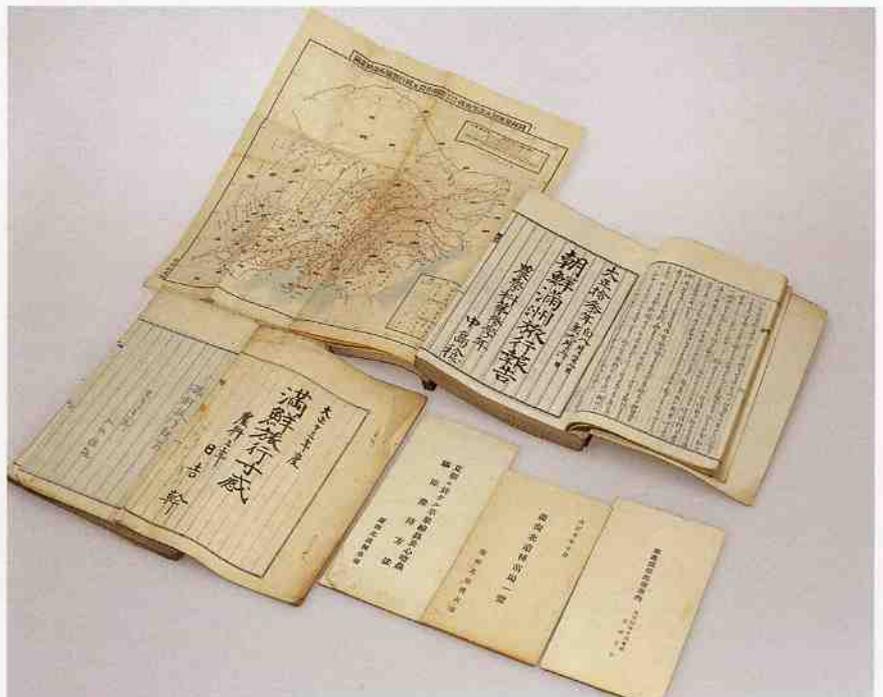
・大正時代の文献は、1922(大正11)年～1926(大正15)年までの5年間分の21文献のみである。ただし、上述の通り1923(大正12)年は欠いている。

・最も古い文献は、1922(大正11)年の入江信雄氏による旅行報告書で、そのタイトルは「満鮮旅行報告」である。

・種別としては、1)研究論文:191件、2)実習報告書:27件、3)旅行報告書:68件、4)実験・講義ノート:18件、5)その他:15件に分けられる。ただし、2)の実習報告書の中には、3)の旅行報告書を含んだものが15文献ある。2)～4)は、全て高等農林学校時代に作成された文献である。1)～5)の内容については下記の通りである。

・ほとんどの文献は単名で書かれているが、2名または3名での共著の文献もある。

・各文献には、仮登録番号(Lit-\*\*\* )を付け登録している。



### 各種別の内容

1)研究論文:1924～1964年までの41年間分の191文献。それらは3年次に作成され文章や図表も充実していることから、当時の卒業論文として製作されたものと思われる。ほとんどの論文は、蝶類、蠅類、虻類、蜂類などの昆虫の形態学及び生態学的研究、あるいは農作物に被害をもたらす害虫駆除に関する研究である。しかし、なかには干拓事業、砂防工事、灌漑工事など、昆虫に直接関係しない論文もある。昆虫の形態学的な研究論文には、多数の詳細な図が添付されている場合が多く、それらは現在でも学術的価値が高いと考えられる。

研究対象地域としては、鹿児島市付近を中心としたものが多いが、中には九州全域や中国満州を対象地域とする論文もある。なお、これらの研究論文の中には、学外協力研究者の永富 昭氏の卒論「バラルリサルハムシに就て」や福田晴夫氏の卒論「トビロウカの卵巣について」なども含まれている。

**2)実習報告書**：1929～1935年までの7年間分(高等農林学校時代のみ)の27文献。その中には、横浜の税関植物検査課や愛知県高浜町の養鶏園における実習報告などがある。全体として「夏期実習報告」というタイトルが多い。この当時の夏期だけに行われた実習であったと思われる。この内の9文献を作成した学生は、実習報告書とは別に研究論文も作成している。それ以外の報告書は、卒論として作成されたようである。

**3)旅行報告書**：1922～1940年までの19年間分(高等農林学校時代のみ)の68文献。満州、朝鮮、台湾、樺太などの近隣諸国への旅行報告もある。半数以上に当たる39文献は、1936年度あるいは年代不明の「佐多旅行報告書」である。これらの文献は一年次による作成で、おそらく1936年度の夏期のみ一年次全員で行われた旅行と考えられる。その内容は、鹿児島県の地質、佐多地方の植物、動物、産業など多岐にわたっており、100ページを越える報告書も少なくない。全部で39文献あることから、当時の1学年の学生数が少なくとも39名はいたと思われる。

**4)実験・講義ノート**：18文献。多くの文献は正確な作成年代が不明だが、全て高等農林学校時代のものである。これらのほとんどは、動物学の実験ノートである。

**5)その他**：1925～1962年までの38年間分の15文献。それらは、研究論文のための資料、英文の訳書、それに野帳などである。(桑山 龍)

## 理化学機器・試料の整理ボランティア

私は約半年前からボランティアをさせていただいています。ボランティアを始めたきっかけは、博物館に行ったときにボランティアを募集しているということを知ったことでした。現在は農学部から寄贈されたプレパラート標本の整理とプレパラートについているラベルをチェックする作業をしています。今までに確認した標本の内容は、主に原生動物などの微生物とネコやハトの臓器などです。標本の中には1912年に作られたにも関わらず、顕微鏡でははっきりと見ることが出来るものもあります。また当時書かれたノートに出てくる研究材料と一致するプレパラートもあり、どういう目的で作られたものなのかということがわかったものもあります。今のところまだほんの一部しか確認できていないので、これから先もっといろいろなことがわかってくるのではと思っています。

(渡辺則子)



私が博物館ボランティアを始めようと思った理由は、多くの人と知り合い、博物館でしか学べないようなことを学びたいと思ったからです。実際に博物館でボランティアをするようになって、知り合いが増えました。昨年の金の特別展の準備は、とてもたいへんでしたが、ボランティアの方々と一緒に楽しくできましたと思います。現在、私は博物館で、昔、鹿児島大学でつかわれていた実験機器などの名前、製造年代、製作所などを調べるお手伝いをしています。実験機器の中には、地球儀、六分儀など珍しい機器もたくさん見つかっています。古い機器の名前や製造年代はインターネットや図書館に行き調べて、先生方にお聞きしたりして調べていますが、まだわかっていない実験機器もあります。このボランティアを始めて、私は、古いものの大切さをあらためて実感しました。(末岡晴奈)

## 農学部より養蚕繊維関係資料みつかる

2002年11月、農学部生物資源化学科食品機能化学講座の保管棚より、多数の資料が見つかった。サンプル管に詰められたカイコの繭や綿、あるいは糸やロープなどの養蚕繊維関係資料である。なかには「鹿児島高等農林学校」のラベルを貼った美しいガラス瓶も認められた。総合研究博物館では、同学科藤井信教授よりこの資料の寄贈を受けたので、ここに紹介したい。

『鹿児島大学農学部七十年史』によれば、鹿児島大学における養蚕教育研究は1920(大正9)年鹿児島高等農林学校に全国唯一の養蚕学科が設置されたことに始まり、鹿児島農林専門学校養蚕学科、同繊維農業科をへて、昭和24年鹿児島大学農学部蚕糸学科へと引き継が

れた。その後、1963(昭和38)年の改組により、蚕糸学科3講座は農学科養蚕及び昆虫生理学講座、畜産学科家畜育種学講座、畜産学科畜産化学講座へと発展的解消をとげる。さらに、1968(昭和43)年に養蚕及び昆虫生理学講座が熱帯作物学講座へ改称されたことにより、その歴史に終止符が打たれた。養蚕学科設立当初の目的は九州地方での養蚕業の開発普及にあったが、48年間にわたる研究内容は養蚕製糸のみならず、広く動植物繊維原料の生産や、精製、加工にまで及んだ点が注目される。

今回寄贈された資料を大まかに区分してみると、カイコ・繭関連標本75点、綿花標本24点、合成繊維標本63点、実験処理サンプル32点、繊維原料7点、「人造絹糸製造順序標本」1点、糸サンプル27点、綿サンプル14点、布サンプル1セット、飼料作物種子標本41点、その他27点となった。つまりこの資料は、

鹿児島大学における養蚕、繊維研究の歴史と広がりを示す、格好の学術資料であるといえよう。しかし残念ながら、この資料が収集された経緯や当時の状況を示す記録がみつからない。当時の事情を知る先輩諸氏からの情報提供をお願いする次第である。(落合雪野)



## 岡崎18号墳第2次調査

ニュースレターNo.6に紹介したように、総合研究博物館 橋本は大隅半島の肝属郡申良町岡崎18号墳の発掘調査を継続して行っています。ここで2003年2月に第2次発掘調査を実施しました。その概略を紹介します。

第2次調査では、第1次調査の成果から古墳墳丘裾部分に存在が推察できた土器を用いたおよそ1600年前の祭祀空間の検出を主な調査目的としました。

調査では目的どおりに古墳に伴う土器の広がりを確認することができました。それらは須恵器と土師器という2種類の土器からなり、いずれも粉々に砕けた状態で出土しました。

その砕け方は単に壊れたというのではなく、意図的に壊した状況だと考えられます。古墳という埋葬の場に接してお祭りを行い、そこで用いた土器はその場で壊すことで祭りを終えているようです。

出土した須恵器は高さ約90cm、胴部径約60cmの大甕たるがたはそう はそう、樽形甕、甕の3器種からなっていました。大甕は液体を入れる貯蔵容器で、樽形甕・甕は酒器の可能性が高いので、お祭りの酒と関係するものでしょうか。

土師器は高杯の破片がたくさん出土しました。具体的な個体数は現在確認中ですが、8個体くらいはありそうです。他には壺や、小型壺もあります。高杯は食物などをお供えをするうつわとみられます。これらは須恵器というやきものが現れたもっとも初期の初期須恵器といわれる5世紀前半の非常に稀少で重要な資料です(前回TK216型式としましたがTK73型式とあらためます)。現在、土器は整理作業中です。なお埋葬施設は確認できませんでした。長い時間のなかで流失してしまったようです。

調査は2003年度も継続して行います。

(橋本達也)



## 2002年度後半の活動

- 2月4日 10:00～15:00 生涯学習県民フェア 参加  
大口文化会館(大口市)  
総合研究博物館ミニ展示・各講座紹介・パンフレット配布等
- 3月10日 13:30～16:00 ワークショップ  
「エコツーリズム ー生態資源からの視点ー」  
場所: 郡元キャンパス総合教育研究棟201号室  
講師: 山田 勇 [京都大学東南アジア研究センター]

## 2003年度前半の活動

- 5月17日 10:00～15:00 生涯学習県民フェア 参加  
かごしま県民交流センター(鹿児島市)  
総合研究博物館ミニ展示・各講座紹介等
- 5月31日 13:00～16:00 研究交流会  
海と陸のあいだー渚の自然と生物多様性ー  
場所: 郡元キャンパス 総合教育研究棟201号室 参加自由 入場無料  
加藤 真 [京都大学大学院人間・環境学研究科]「汀線の自然史」  
佐藤 正典 [鹿児島大学理学部]「ゴカイからみた干潟の豊かさ」
- 6月10～26日 第1回企画展  
「郡元キャンパスの古墳時代」  
場所: 鹿児島大学附属中央図書館 1Fロビー
- 6月14～15日 公開研究会 九州前方後円墳研究会 第6回鹿児島大会 共催  
「前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性」  
場所: 鹿児島大学教育学部大講義室  
【地域発表】古墳築造の周縁域の諸相  
柳沢 一男 [宮崎大学教育文化学部]「南九州における古墳の形成と展開」  
尾上 博一 [厳原町教育委員会]「壱岐・対馬および長崎の古墳の様相」  
村上 恭通 [愛媛大学法文学部]「四国西部における前方後円墳の展開」  
藤沢 敦 [東北大学埋蔵文化財調査研究センター]「北の周縁域の墳墓」  
安座間 充 [鹿児島大学埋蔵文化財調査室]「琉球列島の古墳時代併行期前後の様相」  
【講演】  
白石太郎 [国立歴史民俗博物館]「周縁から前方後円墳を考えるー前方後円墳体制論の再検討ー」  
【テーマ発表】交流の諸相～南九州を中心として～  
坪根 伸也 [大分市教育委員会]「南九州の集落と土器の様相」  
橋本 達也 [鹿児島大学総合研究博物館]「副葬鉄器からみる南九州の古墳時代」  
大西 智和 [鹿児島国際大学国際文化学部]「西日本の積石塚ー島の積石塚を中心にー」  
木下 尚子 [熊本大学文学部]「古墳時代併行期の九州と南島」  
竹中 正巳 [鹿児島大学歯学部]「人類学からみた南九州の古墳時代人」  
【Poster Session】  
【Symposium】
- 6月15日 日本熱帯生態学会 第13回 年次大会 公開シンポジウム 後援  
「熱帯林の減少とその原因」  
場所: 鹿児島大学郡元キャンパス 稲盛会館  
米田 健 [鹿児島大学農学部生物環境学科]「はじめに」

鈴木 英治 [鹿児島大学理学部]「インドネシアにおける森林保護区の荒廃」  
 井上 真 [東京大学大学院農学生命科学研究科]  
 「熱帯林の保全におけるローカルガバナンスの重要性—西クタイ県の試みをもとに」  
 竹田 晋也 [京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科]  
 「東南アジア大陸部産地の森林保全—ミャンマーとラオスの事例から—」  
 薄木 三生 [東洋大学国際地域学部]「東南アジアの熱帯林を中心とした国立公園・保護地域の現状と課題」  
 総合討論

### ■6月21日 10:00～15:00 公開講座

#### 大学博物館へのいざない「鹿大に集められた植物—植物園と標本室—」

場所：郡元キャンパス 総合教育研究棟201号室・植物園・植物標本室

馬田 英隆[鹿児島大学農学部]・池田 豪憲[鹿児島大学総合研究博物館学外協力研究者]・

丸野 勝敏[鹿児島大学総合研究博物館学外協力研究者]・落合 雪野[鹿児島大学総合研究博物館]

### ■7月19日 13:30～16:30 市民講座

#### 「川の自然と防災—平成5年豪雨災害から10年—」

場所：郡元キャンパス 総合教育研究棟201号室 無料 参加自由

8・6豪雨災害を映像で振り返る(ビデオ上映)

地頭 隆 [鹿児島大学農学部]「平成5年に何が起こったか—土砂災害を中心に—」

大木 公彦 [鹿児島大学総合研究博物館]「8・6豪雨災害から何を学ぶのか」

### ■7月26日 10:00～16:45 公開講座 自然体験ツアー

#### 「甲突川の自然環境と防災」

対象：小学5・6年生以上の児童・生徒および一般45名

場所：甲突川の源流から河口まで(貸し切りバスで移動)

案内者：大木 公彦[鹿児島大学総合研究博物館]・穴澤 活郎[鹿児島大学理学部]・

井倉 洋二[鹿児島大学農学部高隈演習林]

### ■7月26日～8月6日 鹿児島県立図書館展示 共催

#### 「地球からの贈り物～日本の金鉱石・鉱物展」

### ■8月2日 13:30～16:30 博物館実験教室

#### DNAを抽出、分析しよう(実験) さまざま役立つDNA分析(講義)

場所：鹿児島大学郡元キャンパス 総合教育研究棟201号室

対象：中学生・高校生15名

講師：内木場 哲也[鹿児島大学総合研究博物館]

## ●今後の予定

### ■10月23日～11月25日

#### 第3回 特別展

場所：鹿児島大学郡元キャンパス 総合教育研究棟 2F プレゼンテーションホール 無料

海に生きた生命の歴史について特別展を開催します。

主要な展示は鹿児島大学理学部を中心に集められた海の生き物の化石です。

期間中にテーマにちなんだ市民講座、海にちなんだ曲の演奏会などを計画しています。

詳細は後日広報します

■発行／2003年8月15日 ■編集・発行／鹿児島大学総合研究博物館 〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-30

TEL/FAX：099-285-8141

<http://www.sci.kagoshima-u.ac.jp/~arima/museum/index.htm>